洛陽における漢鏡副葬墓について

南　　健太郎

1. はじめに

東アジアにおいては紀元前2000年ごろの斉家文化期から銅鏡の使用が開始され、春秋戦国時代を経て、漢代には東アジア全域に漢鏡が拡散する。斉家文化期の銅鏡として青海省貴南県尕馬台25号墓出土鏡は著名であるが、当鏡は鈕が欠損しており縁辺の二ヶ所に穿孔が施されている。これは一般的に紐を通すためのものと考えられてきたが、実際は鏡に木製の柄を取り付けるためのものであったことが指摘されている（周2005）。また鈕に紐が通された状態のものや銅鏡を設置する鏡台や鏡架も出土している。さらに壁画や画像石には銅鏡を手に持って使用している場面が描かれており、大陸においては銅鏡が姿を映すために使用されていたことが明らかである[1]。

このように大陸において姿見として使用されていた銅鏡であるが、東アジア、特に日本列島への拡散後はその意義を大きく変容させた。日本列島では漢鏡拡散の初期段階において30面前後の前漢鏡が一つの墓に副葬されるものがみられる。そのような墓には漢鏡の他にも舶載品（金銅製四葉座金具やガラス璧など）や青銅武器が副葬され、墓の規模や立地は他の墓とは隔絶している。このことから前漢鏡には権威の象徴としての価値が付されていたことが指摘されている（高倉1993）。一つの墓に30面前後の銅鏡を副葬する例は中国の漢墓でもほとんど例がなく、ユーラシア大陸全体を見渡してもこれほど多量の漢鏡が出土する地域は皆無であるし（新井他2009）、漢鏡の出土量は陸続きで距離的にも近い韓半島をはるかに凌駕している。

ここで問題となるのが何故日本列島にこれほど多くの銅鏡がもたらされたのかという点である。これは送り手となる漢王朝の選択と受け手となる北部九州の集団の要求の結果と考えられるが、この点はこれまで明確にされてこなかった。しかしこれは漢王朝の周辺地域への影響力の拡大とそれがもたらした日本列島の社会変化を考える上で極めて重要な視点である。

このような問題を考える上で筆者は漢鏡がその故地である大陸においてどのような意義を有していたのかを明らかにすることが必要であると考えている。なぜなら日本列島では漢鏡は権威の象徴とされているが、それが大陸でどのような意義を有していたのかが明らかにされなければ、漢王朝がどのような意図をもって大量の漢鏡を与えたのかが見えてこないためである。さらにこのような視点は周辺諸地域への漢鏡拡散の意義を考える上でも重要である。

このため本論では漢代の中国における銅鏡の意義を明らかにする研究の第一歩として洛陽における漢鏡副葬墓の分析を行っていく。洛陽の漢墓を分析対象とした理由は前漢から後漢にかけての銅鏡がまとまって出土していることと1959年に刊行された『洛陽焼溝漢墓』（中国科学院考古研究所編1959a）を中心として漢墓の分類と編年が整理されていることによる。本論では洛陽における漢鏡の

副葬状況の検討を行い、漢鏡副葬のメカニズムを明らかにしていく。

2. 漢鏡研究の現状と本論の視点

(1) これまでの銅鏡研究

銅鏡研究にはこれまで非常に長い歴史があり、その視点も多岐にわたっている。最も盛んに行われてきたのは分類・編年と文様や銘文の意義に関する研究である。銅鏡の銘文は文様は時系列の変化として捉えられ、東アジアのみでなくユーラシア大陸の各地域から出土することから、年代を決める尺度として重視されてきた。日本列島においても遺跡や遺物の年代を決定するための重要な遺物の一つとなっている。また日本列島では多量の漢鏡が出土することから弥生時代における大陸との関係や日本列島の地域間関係形成に注目した研究がみられる。

このように発掘調査によって出土した銅鏡の研究は重要であるが、これまで紀年銘遺物などがみつかっていない弥生時代における年代研究への寄与は大きい。その中でも漢代の銅鏡生産を7期に区分し、各時期の様相を型式学的検討から明らかにした岡村秀典の業績は特筆される（岡村1984・1990・1993・2005）。『洛陽焼溝漢墓』の報告では資料数が少ない鏡式や型式細分が不足しているものがあり日本列島出土漢鏡への直接的応用には不安があったが、岡村の示した漢鏡編年によって、細部において検討の余地はあるものの[2]、おおむね型式変化の方向性や各時期に出土する漢鏡の内容は明らかにされたと言っても過言ではなかろう。

また日本列島における銅鏡拡散についても研究が深化しており、特に高倉洋彰による漢鏡、破鏡、小形仿製鏡の総合的研究は日本列島における銅鏡の社会的意義を明らかにする上で重要である。高倉は完形鏡に権威の象徴としての価値が付されていたことを指摘し、破鏡や小形仿製鏡が完形鏡の不足を補うものとして各地域に拡散したことを明らかにした（高倉1972・1976・1985・1993など）。また寺沢薫も九州以東への舶載製品の拡散状況を検討し、弥生時代の近畿地方に九州を上回るほどの舶載製品が拡散したことは考え難いとしている（寺沢1985）。筆者も弥生時代における銅鏡の拡散形態について検討し、九州における漢鏡・破鏡・小形仿製鏡の拡散形態や近畿地方における北部九州からの銅鏡の受容と拡散状況を明らかにしてきた（南2007・2008・2009）。

(2) 銅鏡研究の課題

このように銅鏡研究においては分類や編年、日本列島における銅鏡の拡散形態について活発な研究が行われているのに対して、銅鏡がどのような意義をもつのか、端的に言えば「銅鏡とは何なのか」という根本的な問題に関しての研究は滞っている。この点について高倉は弥生時代の銅鏡を北部九州と周辺地域の結合の強弱を表わすための器物であったことを指摘している。また武末純一は墓に副葬される青銅器の中では完形漢鏡が最上位の副葬品であり、破鏡や小形仿製鏡との価値の相違を明らかにしている（武末1990）。筆者も銅鏡にそのような機能が付されていたことに異論はないが、拡散後に実際どのように使用し、そこにどのような機能や意義が存在し、最終的に廃棄されたのかという点まで踏み込んだ研究はほとんど見られない。このような点を明らかにするためには考古学的見地からの検討に加え、民族誌の応用や他の地域・時代との比較検討が必要であることは言うまでもない。

(3) 本論の視点と分析方法

このように銅鏡研究における今日的課題として銅鏡のライフサイクルを明らかにすることが挙げられる。つまり銅鏡がどこで製作され、どのように拡散し、どのように使用され、どのように廃棄され

たのかという点を明らかにしてこそ銅鏡の社会的意義に迫ることができるのではないかと考えている。そして日本列島において権威の象徴であった銅鏡の故地である大陸、特に漢代に都が置かれた西安や洛陽をはじめとした中原地域の様相を明らかにすることによって日本列島出土鏡研究にも新たな知見をもたらすことができるのではないだろうか。また中原地域の様相を周辺地域と比較し、各周辺地域相互の比較を行うことで弥生時代の新たな歴史像を構築することも可能であると考えている。

このような問題意識を念頭に置き、本論では洛陽における銅鏡の出土状況に着目し、どのような銅鏡がどのような墓に副葬され、そこにどのような意義が存在したのかを明らかにしていく。具体的には銅鏡の面径の大小や数量にどのような意味があるのか、そして銅鏡副葬にどのような意義が存在したのかを明らかにするために『洛陽焼溝漢墓』の墓葬編年に従って銅鏡の出土数、面径についての検討を行う。焼溝漢墓編年では第１期～第２期を前漢中葉、第３期前半を前漢後葉、第３期後半を新、第４期を後漢前葉、第５期を後漢中葉、第６期を後漢後葉とされている（中国科学院考古研究所編1959a）。

3. 洛陽出土漢鏡の検討

(1) 銅鏡の副葬面数

洛陽ではこれまで370面の漢鏡が報告されている[3]。これらの墓には一つの墓に一人を埋葬した墓と複数の人数を埋葬した墓が見られるため、これらを区別して前者を単葬墓、後者を複葬墓とする。そして被葬者１人に対して何面の銅鏡が副葬されるのかを検討し、銅鏡がどのような人物に副葬されるのかを明らかにするために以下のように被葬者数と銅鏡を何面副葬するかに着目して墓葬を分類する。まず単葬墓に１面の銅鏡を副葬する場合を単葬単面墓、複数面を副葬する場合を単葬複数面墓とする。また複葬墓の場合は１面を副葬する場合を複葬単面墓、複数面を副葬する場合を複葬複数面墓とする。

単葬墓（被葬者１人）
- 単葬単面墓（銅鏡１面を複葬）
- 単葬複面墓（銅鏡複数面を複葬）

複葬墓（被葬者複数）
- 複葬単面墓
- 単葬複面墓

銅鏡が出土した墓のうち単葬墓は116基あるがその内訳は単葬単面墓が100基、単葬複数面墓が16基である。このように洛陽においては単葬墓の場合８割以上が１面のみの副葬であり、時期別にみてもこの傾向は変わらない（図１）[4]。また単葬単面墓では出土位置が判明しているものはすべて棺内に副葬されている。一方、単葬複数面墓（２面を副葬）のうち報告書でその副葬位置のわかるものは16基中７基あるが、このうちの５基（可能性のあるものも含む）が１面を棺内に、１面を棺外に副葬している（表１）。このことから単葬墓に銅鏡を副葬する場合は棺内に１面の銅鏡が副葬されることが一般的であり、複数面を副葬する場合にも棺内に１面の銅鏡を副葬

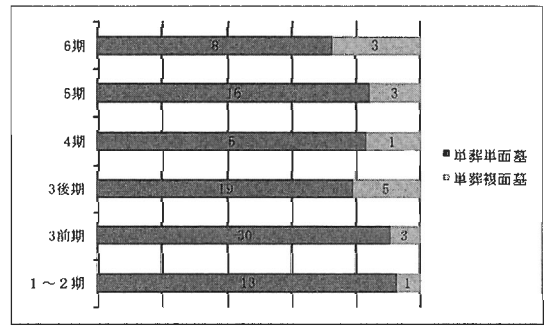

図１　副葬面数の割合

表１　単葬複数面墓における銅鏡の出土位置

No	遺跡名	焼溝漢墓編年	鏡種	面径	出土位置
1	河南新安鉄門鎮西漢墓墓鉄37	１期以前	蟠螭文鏡	9	
			草葉文鏡	13.5	
2	洛陽浅井頭西漢壁画墓（CM1231）	３期前半	異体字銘帯鏡	9	棺外頭位部
			家帯富貴鏡	7.6	頭部中央
3	洛陽焼溝漢墓138号墓	３期前半	異体字銘帯鏡（昭明鏡）	10	
			異体字銘帯鏡（日光鏡）	8	
4	洛陽焼溝漢墓41号墓	３期後半	異体字銘帯鏡（日光鏡）	7.6	
			異体字銘帯鏡（日光鏡）	7.8	
			方格規矩鏡	13	
5	洛陽西郊漢墓3014	３期後半	方格規矩鏡	15.4	
			獣帯鏡 or 方格規矩鏡	8.8	
			獣帯鏡 or 方格規矩鏡	8.8	
6	洛陽五女塚267号新莽墓棺内	３期後半	方格規矩鏡	18.5	頭部中央
	洛陽五女塚267号新莽墓棺外		方格規矩鏡	16.3	棺外(陶器などとともに主室外に置かれていた)
7	洛陽五女塚新莽墓（IM461）東棺	３期後半	虺龍文鏡	9.4	頭部中央
	洛陽五女塚新莽墓（IM461）棺外		細線式獣帯鏡	10.5	棺外
8	洛陽孟津漢墓（M8）棺外	３期後半	異体字銘帯鏡	13.3	棺外右側長辺
	洛陽孟津漢墓（M8）棺内		異体字銘帯鏡	7.8	頭部左側
9	洛陽焼溝漢墓1005号墓	３期	虺龍文鏡	10.5	
			方格規矩鏡	10	
10	洛陽西郊漢墓7019	４期	異体字銘帯鏡（昭明鏡）	10	
			方格規矩鏡	9.7	
11	洛陽西郊漢墓6003	５期	虺龍文鏡	?	
			方格規矩鏡	18.6	
12	洛陽西郊漢墓7031	５期	虺龍文鏡	9	
			内行花文鏡	9.5	
13	洛陽西郊漢墓10016棺外	５期	方格規矩鏡	15.5	棺外脚部左側
	洛陽西郊漢墓10016棺外(後室への通路)		内行花文鏡	22.2	後室への通路（単独）
14	洛陽焼溝漢墓147号墓	６期	内行花文鏡	13	棺内腹部
			獣首鏡	8.3	棺外（二人目被葬者頭部左側の可能性あり）
15	洛陽東漢光和二年王当墓（M1）	６期	双頭龍文鏡	9.7	
			双頭龍文鏡（？）	?	
16	洛陽唐寺門 M2号墓	６期	獣首鏡	9.2	脚部？
			内行花文鏡	10.8	頭部？

する傾向が強いということができる。つまり銅鏡が副葬される場合は被葬者の棺内には少なくとも１面の銅鏡が副葬されたということができる。

複葬墓は135基あるが、このうち２人埋葬が110基、３人埋葬が22基、４人以上埋葬が３基である。これらのうち複葬単面墓は84基、複葬複面墓は51基である。このことから複葬墓の場合は数人の被葬者の１人に銅鏡が副葬されている場合が多いことがわかる。これをさらに詳しく見ると、２人埋葬の場合は110基中の33基に２面の銅鏡が副葬されている。この場合、出土状態が明らかなものを見ると、すべての銅鏡が棺内に納められている。また３面以上が副葬されている墓が６基あるが、これらについても棺内に副葬されるのは１人の被葬者につき１面であり、その他は棺外から出土している。３人以上を埋葬した墓についても出土位置が判明しているものに関しては洛寧Ｍ４号墓を除いてすべてが被葬者１人に関して１面が棺内に納められている。これらのことから複葬墓に関しても１棺につき１面の副葬が一般的であったといえよう。

このように漢代の洛陽においては銅鏡を副葬する際は被葬者１人に副葬される面数は１面であったことがわかる。

(2) 銅鏡副葬被葬者についての検討

では次に複数人数が埋葬された場合はどの被葬者に鏡が副葬されているのかを検討していく。これ

は鏡が墓主に副葬されているのか、あるいはその他の被葬者に副葬されているのかでその意義付けが変わってくるため非常に重要な問題である。このためここでは複葬墓についてこの点を検討していきたい。なお本論では棺内や耳室に納められた副葬品の質や量、埋葬位置から墓主か否かを判断した。

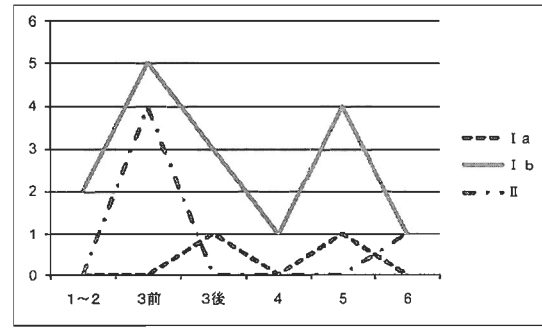

図２　銅鏡副葬被葬者の推移

複葬墓のうち出土位置が明らかなものは22基あるが、これらをどの被葬者に副葬されているかによって分類する。まず墓主に複葬されているものをⅠ型とし、さらに墓主のみに副葬されているものをⅠａ類、墓主とその他の被葬者にも副葬されているものをⅠｂ類とする。また墓主ではない被葬者にのみ銅鏡が副葬されているものをⅡ型とする。これらを時期別に見ていくと、各期においてⅠｂ類が最も高い割合を占めていることがわかる（図２）。ここで注目しなければならないのはⅠａ類よりもⅡ型の方が量的に多く、特に３期前半においてはⅡ型の方が多いという点である。Ⅰａ類とⅡ型はすべて複葬単面墓であることから、これは複数の被葬者が副葬される際に１面のみ副葬する場合は墓主ではなく、その他の被葬者に副葬されることが多かったということを示しているのである。

(3) 銅鏡の面径について

次に銅鏡の面径についての検討を行う。これまでの研究では大型鏡が高い階層の被葬者の墓に副葬されることが指摘されている（岡村1999、宮本2000）。特に各地域に置かれた諸侯以上の階層についてはこの傾向が著しい。中山国王劉勝墓とされる河北省満城一号漢墓出土草葉文鏡は20.7cmで、満城二号漢墓出土鏡も四乳獣文鏡が25.4cm、蟠螭文鏡が18.4cmと大型鏡で、二号漢墓にはさらに4.8cmの連弧文鏡という明器とも考えられる銅鏡も副葬されていた（中国社会科学院考古研究所編1980）。また広陽頃王劉建墓とされる北京市大葆台一号漢墓でも３面の漢鏡が出土しているが、虺龍文鏡が19cm、星雲文鏡が15.5cm、異体字銘帯鏡が15cmとやはり大型の漢鏡が副葬されていた（中国社会科学院考古研究所編1989）。このように前漢代の諸侯王クラスの墓には20cm前後の漢鏡が副葬され、なおかつ複数面の漢鏡がみられるようである。後漢代においても１世紀後半の中山国王墓と考えられている河北省北庄漢墓においても36cmの内行花文鏡、30cm前後の内行花文鏡など３面の銅鏡が副葬されており、19.8cmから28.7cmの鉄鏡も５面出土している（河北省文化局文物工作隊1964）。このように後漢代においても前漢代と同様に諸侯王の墓には大型の鏡を複数面副葬することが行われていたようである。

銅鏡の面径については明確な線引きをすることは難しい。例えば10cm以下を小型とした場合、9.9cmと10.1cmは異なるものに分類されるが、見た目の大きさや重量などはほとんど変わらずその線引きに何の意味があるのかが不明瞭である。しかし「やや大型の」や「比較的大型の」という表現ではそれがどの程度の大きさのことを示しているのかがわからない。このため本論では面径の大小による分類は行わず単葬単面墓と単葬複数面墓、複葬単面墓と複葬複数面墓の比較を行い、面径の大小が何に起因しているのかを検討する。

まず単葬墓について見てみると、単葬単面墓は最小のもので6.3cm、最大のもので23.2cmである。一方、単葬複数面墓は最小のもので7.6cm、最大のもので22.2cmである。両者に面径の差異はほぼみ

られず、最大のものと最小のものの間の推移も同じような状況をたどっている。

ここで注目しなければならないのは洛陽においても20cm前後の銅鏡が出土しているということである。上述のように各地域の諸侯王クラスには20cm前後の銅鏡が副葬されており、岡村秀典は前漢の大型草葉文鏡などが官営工房で特別に製作されたものとして16cm前後のものと区別する必要性を指摘している（岡村1999：P10－14、P20－22)。洛陽出土鏡においては前漢段階のこのような大型鏡は少ないが、洛陽西郊漢墓3206号墓では17.9cmの異体字銘帯鏡が出土している。これは上述の大葆台一号漢墓出土異体字銘帯鏡よりも大きく、諸侯王クラスの墓で出土する鏡と比べても遜色ないほどの大きさである。西郊漢墓3206号墓は複葬単面墓であるため、西郊漢墓における同時期の複葬単面墓と比較してみよう（表２)。西郊漢墓は第３期前半の複葬単面墓が16基あり、面径は3083号墓出土の6.7cmが最小である。これらを墓の構築方法、規模、共伴した副葬品の面で比較してみよう。墓室の構築方法については土壙墓と小磚室墓がある。17.9cmの異体字銘帯鏡が出土した西郊漢墓3206号墓は土壙墓であり、墓室の幅は土壙墓と小磚室墓を合わせて最大であるが、長さは４番目であり、この中では規模は比較的大きいが決して突出したものではないということがわかる。次に副葬品をみてみよう。陶器の種類については、器種構成や数量でばらつきがみられる。この中で器種・量ともに豊富なのは3050号

表２　複葬単面墓出土鏡の面径と墓葬形態・副葬品

No	遺跡名	墓室構築	墓サイズ			耳室数	面径	共伴遺物				
			長さ	幅	高さ			陶器	銅器	鉄器	石製品	その他
1	洛陽西郊漢墓3083	土壙	3.96	1.86	?	1	6.7	壺13、鼎1、敦1、倉5、?1、瓮3、罐4	釜1			
2	洛陽西郊漢墓3085	小磚	3.86	1.96	1.72	2	7	壺11、鼎2、敦2、倉9、?1、瓮2、罐3、奩1、釜1、洗1		刀 1、剣 1、帯鈎1	石圭1、長方石板1	
3	洛陽西郊漢墓3086	小磚	3.6	1.8	1.53	1	7.9	壺8、鼎1、敦1、倉11、?1、瓮1、罐異1	帯鈎1			
4	洛陽西郊漢墓3171	小磚	4	1.88	1.7	2	8.9	壺9、鼎2、敦2、倉13、?2、瓮2	釜、帯鈎1、軸、〻形飾1	刀 2、剣1		
5	洛陽西郊漢墓3154	小磚	3.82	1.8	1.8	2	9	壺11、鼎1、異1、敦2、倉10、？1	釜1	刀 1、剣1		骨环3
6	洛陽西郊漢墓3166	小磚	4.14	1.9	?	2	9	壺9、鼎1、敦1、倉6、?2、罐1、奩6、洗1、炉1	釜1	刀3	長方石板1	磚1
7	洛陽西郊漢墓3026	土壙	4.37	1.92	?	1	9.7	壺7、鼎1、敦1、倉5、?1、瓮1、罐2、洗1	帯鈎1、弩机1、鋪首3、环2、柿蒂形飾4	刀4		
8	洛陽西郊漢墓3027	小磚	4	1.8	1.7	1	9.8	壺7、倉4、？1、井1、罐2、甑1				
9	洛陽西郊漢墓3171	小磚	4	1.88	1.7	2	9.9	壺9、鼎2、敦2、倉9、?2、瓮2	釜1、帯鈎1、軸、〻形飾1	刀 2、剣1	長方石板	
10	洛陽西郊漢墓3037	土壙	4.08	1.88	1.25	1	10	壺10、鼎1、敦1、倉8、?1、井1、奩5	釜1	刀1		
11	洛陽西郊漢墓3236	土壙	3.13	1.9	?	2	10.5	壺3、鼎1、敦1、倉2、?1、井1、罐2	帯鈎1	刀1		
12	洛陽西郊漢墓3050	小磚	3.91	1.88	1.65	2	10.7	壺22、鼎1、異2、敦1、倉10、？1、瓮1、罐4、奩1	軛1、冒飾3、軎1、蓋弓帽1、柿蒂形飾11	刀 1、剣1		
13	洛陽西郊漢墓3206	土壙	3.78	1.96	?	2	17.9	壺8、鼎1、敦1、倉5、?1、瓮1、盆1		刀1		
14	洛陽西郊漢墓3013	土壙	4.24	1.92	1.54	なし	不明	壺9、鼎1、敦1、倉5、?1、瓮1、盆1、炉1	釜1、环5	刀2		
15	洛陽西郊漢墓3151	小磚	5	1.85	1.8	2	不明	壺 13、鼎 1、敦 1、倉12、？1、瓮1、罐2、奩1	刀1、帯鈎1、弩机1、柿蒂形飾10	刀 1、鉄器片		
16	洛陽西郊漢墓3008	小磚	3.66	1.83	1.6	2	記載なし	壺9、鼎3、敦3、倉10、?2、瓮1、罐1、洗1		刀 1、剣1		

表3　単葬単面墓出土鏡の面径と副葬品

No	遺跡名	墓サイズ			面径	共伴遺物					
		長さ	幅	高さ		陶器	銅器	銅銭	鉄器	玉類	その他
1	洛陽西郊漢墓7001	3.24	1.14	1.18	7.3	壺3、？1、井1、罐9		○		ガラス珠3、瑪瑙珠1、水晶玉4、緑松石佩飾1	
2	洛陽西郊漢墓7056	1.9　1.83	1.58　1.34	？	11.2	壺1、倉3、瓮1、罐2					
3	洛陽西郊漢墓9017	2.4　2.44	2.4　1.86	2.1　1.66	18.5	壺1、鼎1、敦1、瓮1、方盒1		○	棺釘		漆器片
4	洛陽焼溝漢墓1023	2.20　2.58	2.44　1.60	？	20	壺2、鼎1、敦1、倉1、？1、井1、罐1、甕2、方盒1、盆1	鈴1	○	刀2、矛1、釜1		

墓であり、3206号墓は器種・量ともに他の墓よりも少ない。また注目すべきは銅器と鉄器である。この中で銅器が豊富なのは3171号墓、3026号墓、3050号墓、3151号墓で、これらの墓にはそれぞれ複数の鉄器が副葬されている（3151号墓は刀と鉄器片）。しかし最大の銅鏡が出土した3206号墓はこれに含まれていないばかりか、銅器の副葬はなく鉄器も刀1振しか出土していない。陶器・銅器・鉄器以外の副葬品も銅銭以外出土しておらず、3206号墓は副葬品の面から見ても、他の墓よりも優位にあるとはいえない状況である。

また北庄漢墓と同時期の後漢前期（焼溝漢墓編年第4期）について見ると、焼溝漢墓1023号墓で20cmの方格規矩鏡が出土している。焼溝漢墓では1023号墓のような第4期の単葬単面墓が少ないため洛陽西郊漢墓と比較してみよう（表3）。西郊漢墓においては7001号墓、7056号墓、9017号墓で単葬単面墓が見られ、9017号墓出土方格規矩鏡が18.5cmで最大である。これらは墓室形態が異なるため大きさを単純には比較できないが、同形態の墓である7056号墓と9017号墓を比較すると、長さ・幅ともに面径の大きな鏡を副葬した9017号墓の方が大きい。しかしその差はわずか1メートルに満たないものであり、格差があるとは言い難い。副葬品をみると西郊漢墓では陶器の量は最も小さい鏡を副葬した7001号墓が最も多く、その他の副葬品をみてもガラス珠などの装身具が副葬されており、他の墓よりも優位にある。単葬単面墓の中では20cmの方格規矩鏡が副葬された焼溝漢墓1023号墓が陶器の種類、鉄器が他の墓と比べて多いことが、同時期の複葬単面墓などには単葬単面墓には非常に少ない青銅器が副葬されているものがあり、被葬者数の問題があるため単純に比較はできないが、他の墓よりも卓越しているとは必ずしもいえない。

（4）複数面副葬時の面径について

では複数面が副葬される墓においては面径がどのように作用しているのであろうか。まず銅鏡がどの位置に副葬されるかについて分類を行いたい。複数面が副葬される場合は単葬複面墓と複葬複面墓があるが、それぞれ棺内と棺外に副葬される場合がある。さらに棺外といっても棺の傍に副葬するものと、棺から離れた位置に副葬するものがある。このためまず単葬複数面墓で棺内に2面を副葬するものをＡⅠ類、棺内に1面、棺外で棺の傍らに銅鏡を複葬するものをＡⅡ類、棺外で棺から離れた位置に副葬するものをＡⅢ類、さらに棺外の棺傍らと棺から離れた位置に副葬するものをＡⅣ類とする。また複葬複面墓のうちすべてが被葬者に伴うものをＢⅠ型、すべてが被葬者に伴うが墓主の棺内に2面を副葬するものをＢⅡ類とし、棺外副葬を行う場合はすべての被葬者の棺内と棺の傍らに銅鏡を副葬するものをＣⅠ類、すべての被葬者棺内と棺から離れた位置に副葬する場合をＣⅡ類、限られた被葬者と棺の傍らに副葬されるものをＣⅢ類とする。

表4　単葬複数面墓出土鏡の面径

No	遺跡名	焼溝漢墓編年	副葬位置分類	鏡種	面径	共伴遺物					
						陶器	銅器	銅銭	鉄器	玉器	石製品
1	洛陽浅井頭西漢壁画墓（CM1231）	3期前半	AⅡ	異体字銘帯鏡	9	○	○	○	○	○	○
				家常富貴鏡	7.6						
2	洛陽五女塚267号新莽墓棺内	3期後半	AⅢ	方格規矩鏡	18.5	○	○	○	○		○
	洛陽五女塚267号新莽墓棺外			方格規矩鏡	16.3						
3	洛陽五女塚新莽墓（IM461）東棺	3期後半	AⅢ	蟠龍文鏡	9.4	○	○	○	○		○
	洛陽五女塚新莽墓（IM461）棺外			細線式獣帯鏡	10.5						
4	洛陽孟津漢墓（M8）棺外	3期後半	AⅡ	異体字銘帯鏡	13.3	○	○	○	○	○	
	洛陽孟津漢墓（M8）棺内			異体字銘帯鏡	7.8						
5	洛陽西郊漢墓10016棺外	5期	AⅣ	方格規矩鏡	15.5	○	○	○	○		
	洛陽西郊漢墓10016棺外（後室への通路）			内行花文鏡	22.2						
6	洛陽焼溝漢墓147号墓	6期	AⅢ？	内行花文鏡	13	○		○	○		
				獣首鏡	8.3						
7	洛陽唐寺門 M2号墓	6期	A1	獣首鏡	9.2	○	○	○	○		○
				内行花文鏡	10.8						

A型をみてみると、AⅠ類は頭位と考えられる位置に副葬された銅鏡がやや大きいが脚部に副葬された銅鏡との面径差は1.6cmであり大差ない（表4）。AⅡ類については第3期前半と第3期後半にみられるが、どちらも棺外に副葬された銅鏡のほうが大きく、特に孟津漢墓（M8）では棺内副葬の銅鏡が7.8cmであるのに対して、棺外右側長辺部分に副葬された銅鏡は13.3cmであり、その差は5.5cmであり大きな差異がある。またAⅣ類の西郊漢墓10016号墓では棺外脚部左側に副葬された銅鏡が15.5cmであるのに対して後室の通路部分に置かれた銅鏡は22.2cmで5期の洛陽では2番目の大きさである。このようにA型の単葬複数面墓においてはAⅡ類の場合は面径の大きいものを棺外に副葬するものが多く、AⅣ類のように明らかに被葬者に伴わない場所に副葬される場合も面径の大きい銅鏡が選ばれていた可能性がある。

B型については副葬位置の判明している14基のうち10基はBⅠ類である（表5）。またBⅡ類やBⅢ類のように3面の銅鏡が出土している場合にも2人の被葬者には銅鏡が副葬されている。このことから複葬複数面墓は被葬者には銅鏡が副葬され、それ以上に銅鏡が存在した場合は棺外に副葬されていたようであり、ここでも銅鏡は基本的には被葬者に伴うものであったことが確認される。このためここでは墓主と考えられる被葬者にどのような面径の銅鏡が副葬されるのかについて見ていきたい。BⅠ類については面径の判明している10基の内、7基が墓主の方が面径の大きな銅鏡が副葬されている。しかも墓主とその他の被葬者の面径をみてみると、洛陽東北郊東漢墓（C5M860）では墓主に副葬された銅鏡が12.7cm、その他の被葬者に副葬された銅鏡が8.8cmであり、その差は3.9cmある。この他の墓でもそのほとんどが2.5cm以上の面径差がある。また洛陽老城西北郊81号漢墓においては墓主には完形の異体字銘帯鏡が副葬されていたのに対して、それ以外の被葬者には約1／2の破片が副葬されていた。これに対して墓主の方が面径の小さな銅鏡が副葬される場合をみると、洛陽焼溝漢墓1029号墓で1.7cmの面径差がみられるが、その他の墓では面径差は1cm以下であり、墓主以外の被葬者の方が面径の大きい場合はその差は極めて小さい。このようにBⅠ類においては面径の大きな銅鏡が墓主に伴う場合が多く、面径の面では墓主の方が優位の存在であったことがわかる。またBⅡ類においても墓主には2面、その他の被葬者には1面の銅鏡が副葬されているが、墓主に副葬された銅鏡のうちの1面が16cm、それ以外が9cmと、数量、面径の上で墓主が優位に立っている。この他については、CⅡ類の洛陽西郊漢墓324号墓で墓主以外の人物に面径の大きな銅鏡が副葬されるが、CⅢ類である

表5　複葬複数面墓出土鏡の面径

No	遺跡名	焼溝漢墓編年	副葬位置分類	鏡種	面径	共伴遺物					
						陶器	銅器	銅鈴	鉄器	玉器	石製品
1	洛陽西漢卜千秋壁画墓南棺（墓主）	1～2期	BⅠ	魑龍文鏡	10	○	○	○	○		
	洛陽西漢卜千秋壁画墓北棺			異体字銘帯鏡	11	○					
2	洛陽老城西北郊81号漢墓東棺	2期	BⅠ	草葉文鏡	?	○			○		
	洛陽老城西北郊81号漢墓西棺（墓主）	3期前半		異体字銘帯鏡	?	○		○	○		○
3	洛陽郵電局372号西漢墓（IM372）西棺	3期前半	BⅠ	異体字銘帯鏡	11	○	○	○	○		
	洛陽郵電局372号西漢墓（IM372）東棺（墓主）			魑龍文鏡	10.5	○		○	○		
4	洛陽金谷东站11号漢墓南棺棺外	3期前半	CⅠ	異体字銘帯鏡	7.3	○	○	○	○		
	洛陽金谷东站11号漢墓南棺棺内			異体字銘帯鏡	?						
	洛陽金谷东站11号漢墓北棺（墓主）			異体字銘帯鏡	7.7	○	○	○	○	○	
5	洛陽焼溝漢墓82号墓	3期前半？	BⅠ	異体字銘帯鏡（日光鏡）	7.8	○		○			
	洛陽焼溝漢墓82号墓（南棺）（墓主）			魑龍文鏡	10.5	○	○	○	○		
6	洛陽西郊漢墓3247棺外（前室）	3期後半	CⅡ	異体字銘帯鏡（日光鏡）	8.5	○	○		○		○
	洛陽西郊漢墓3247西棺			方格規矩鏡	16.2			○			
	洛陽西郊漢墓3247南棺（墓主）			獣帯鏡 or 方格規矩鏡	8.9	○	○	○	○	○	
7	洛陽西郊漢墓9002号1（墓主）	3期後半	BⅠ	方格規矩鏡	10.3	○		○	○		
	洛陽西郊漢墓9002号2			魑龍文鏡	8.8	○	○	○	○		
8	河南洛陽北郊東漢壁画墓（C1M689）西棺	3期後半	BⅠ	方格規矩鏡	11.5	○	○	○	○		
	河南洛陽北郊東漢壁画墓（C1M689）東棺（墓主）			方格規矩鏡	14	○	○	○	○		○
9	洛陽焼溝西14号漢墓東棺棺外（墓主）	4期	CⅢ	内行花文鏡	10.8	○	○	○	○		○
	洛陽焼溝西14号漢墓東棺棺内（墓主）			内行花文鏡	14.8						
	洛陽焼溝西14号漢墓西棺棺外			内行花文鏡	?	○		○			○
10	洛陽焼溝漢墓1029号墓南棺（墓主）	5期	BⅠ	内行花文鏡	19	○		○	○		
	洛陽焼溝漢墓1029号墓東棺			内行花文鏡	15.3	○		○	○		
11	洛陽西郊漢墓9007東棺	5期	BⅠ	方格規矩鏡	11.5	○		○	○		
	洛陽西郊漢墓9007西棺（墓主）			方格規矩鏡	9.9	○	○	○	○		
12	洛陽東北郊東漢墓（C5M860）西棺	5期	BⅠ	内行花文鏡	8.8	○		○			
	洛陽東北郊東漢墓（C5M860）東棺（墓主）			方格規矩鏡	12.7	○		○			
13	洛陽金谷園東漢墓（IM337）北棺	5～6期	BⅠ		?	○	○	(○)	○		
	洛陽金谷園東漢墓（IM337）南棺				?	○		(○)	○		
14	河南洛寧東漢墓（M4）東棺（墓主）	6期？	BⅡ	夔鳳鏡？	16	○	○	○	○		
	河南洛寧東漢墓（M4）東棺（墓主）			三獣鏡	9						
	河南洛寧東漢墓（M4）南棺			三獣鏡	9				○		

洛陽焼溝西14号漢墓のように墓主に2面、その他の被葬者には棺外に1面というものもあり、やはり墓主の方が優位にたっている。

このように複数面が副葬される場合には墓主に面径の大きな銅鏡が副葬される傾向があり、面数の上でも墓主に複数面を副葬する場合が多かったということができよう。

4. まとめ

このように漢代の洛陽においては銅鏡を副葬する場合は基本的に被葬者1人につき1面の銅鏡が副葬されており、複葬墓においては複葬複数面墓のように墓主とそれ以外の被葬者にも銅鏡が副葬される場合があるが、複葬単面墓の場合は墓主よりもその他の人物に銅鏡が副葬されることが多いこと明らかとなった。このことから、銅鏡の面数が各人の身分や権威を示しているわけではないということを指摘することができる。また面径についても大きな銅鏡が墓の規模の大小や副葬品の面で優位にたつ墓に副葬されているというわけではなく、面径の小さな銅鏡を副葬する墓のほうが副葬品の質・量ともに優っていることも多い。しかし複葬墓については墓主の方が大きな銅鏡を副葬する傾向がみられることから、銅鏡の大小が各墓の優劣を表わしているのではないが、同じ墓に葬られた人々の中では面径による差異があったものと思われる。

本論の冒頭で大陸においては銅鏡は姿を映す道具としての機能があったことを示した。洛陽の漢墓における銅鏡の副葬状況にはこのような使用法が反映されているものと考えられる。単面副葬の場合には墓主以外の人物への副葬が多いことから、墓主の傍らに葬られた人物（夫人の可能性がある）が銅鏡を所有していたものと考えられ、銅鏡を複数面保有できなかった場合は墓主ではなく夫人などが銅鏡を使用していたものと考えられる。一方で面径については墓主の方が大きい銅鏡を副葬していたことから、複数面を所有することができた場合には墓主が大きい銅鏡を所有していたと思われる。つまり漢代の洛陽においては墓主が大きい鏡を所有することが一般的であったが、1面しか所有できなかった場合は墓主ではなく夫人などが使用していたものと思われる。このことと銅鏡の使用方法をあわせて考えると、姿見としての鏡の使用方法や保有形態が副葬状況に現れており、そこから政治的背景を読み取ることが難しいように思われる。しかし大きい銅鏡が墓主に副葬されていることから家族内においては面径による格差が存在した可能性もある。

今回本論で検討対象とした洛陽における銅鏡副葬墓の中には上記の満城漢墓などの諸侯王などの墓は含まれておらず、特に焼溝漢墓や西郊漢墓は中・下級官人の墓であるとされている。このため銅鏡副葬の傾向は諸侯王らのものとは異なるものであった。特に面径の面では諸侯王クラスの墓では大型の銅鏡が被葬者のランクを示しているが、中原地域の中・下級官人クラスの墓では銅鏡の面径はそれほど重要視されていなかったようである。

本論では洛陽における銅鏡の副葬状況から銅鏡副葬のメカニズムについて検討してきた。その結果、各墓に葬られた被葬者の生前の使用状況や家族関係が銅鏡副葬に大きな影響を与えていたことを指摘することができた。今後は他地域の状況との比較や日本列島との比較を通して銅鏡の意義を明らかにしていきたいと思う。

本稿を草するにあたり、中国社会科学院考古研究所の白雲翔先生には懇切・丁寧なご指導を賜りました。また神川めぐみ、山野ケン陽次郎、森貴教、倉元慎平、楊勇、王方の各氏には文献収集等で大変お世話になりました。謝意申し上げます。

なお、本論は日本学術振興会特別研究員奨励費による成果の一部である。

註

（1）中国出土銅鏡の中には鏡背面の研磨などがまったく行われていないものがあるのに対して、鏡面はどの鏡も非常に丁寧な研磨が施されている。このことからも銅鏡使用が姿を映すためのものであったことがわかる。

（2）岡村の漢鏡分類・編年の再検討が寺沢薫によって行われている（寺沢2004）。また岸本泰緒子により岡村分類の細分化や地域的な特定型式の抽出が行われている（岸本2006・2009）。

（3）本論では報告書の刊行されている『洛陽焼溝漢墓』（中国科学院考古研究所編1959a）『洛陽中州路』（中国科学院考古研究所編1959b）に加え、『考古』、『文物』、『考古学報』、『考古与文物』、『華夏考古』、『中原文物』『考古資料丛刊』を中心に集成を行った。

（4）図1には時期が明確ではないものは含んでいない。

参考文献

（日本語）

新井悟・石渡美江・近藤さおり・岸本泰緒子・折茂克哉　2009「ユーラシア大陸鏡集成（第1版）」『博望』第7号　東北アジア古文化研究所：pp. 93－117

岡村秀典　1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第55号　史学研究会：pp. 1－42

1990「卑弥呼の鏡」『邪馬台国の時代』　木耳社：pp. 3－26

1993「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第55集　国立歴史民俗博物館：pp. 39－82

1999『三角物神獣鏡の時代』吉川弘文館

2005「雲気禽獣紋鏡の研究」『考古論集』川越哲志先生退官記念論文集　川越哲志先生退官記念事業会：pp. 815－830

岸本泰緒子　2006「獣帯鏡に関する一考察」『博望』第6号　東北アジア個文化研究所：pp. 29－43

2009「前漢鏡の地域性について」『駒澤考古』第34号　駒澤大学考古学研究室：pp. 103－113

高倉洋彰　1972「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』第58巻第3号　日本考古学会：pp. 1－30

1976「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2　九州歴史資料館：pp. 1－23

1985「弥生時代小形仿製鏡について（承前）」『考古学雑誌』第70巻第3号　日本考古学会：pp. 94－121

1993「前漢鏡にあらわれた権威の象徴性」『国立歴史民俗博物館研究紀要』第55集　国立歴史民俗博物館：pp. 3－38

武末純・　1990「墓の青銅器－弥生時代北九州例の形式化－」『古文化談叢』第22集　九州古文化研究会：pp. 47－55

寺沢薫　1985「弥生時代舶載製品の東方流入」『考古学と移住・移動』　同志社大学考古学シリーズ刊行会：pp. 181－210

2004「考古資料から見た弥生時代の歴年代」『考古資料大観』第10巻弥生・古墳時代遺跡・遺構　小学館：pp. 332－364

南健太郎　2007「弥生時代九州における漢鏡の流入と小形仿製鏡の生産」『熊本大学社会文化研究』5　熊本大学大学院社会文化科学研究科：pp. 193－211

2008「前漢鏡の破鏡とその拡散形態－破鏡に施される二次加工の検討から－」『王権と武器と信仰』　同成社：pp. 27－37

2009「近畿地方における漢鏡・小形仿製鏡の拡散と銅鏡生産」『考古学ジャーナル』No. 582

ニュー・サイエンス社：pp. 26－30
宮本一夫　2000「彩画鏡の変遷とその意義」『史淵』第137輯　九州大学文学部：pp. 159－191

(中国語、abc 順)
河北省文化局文物工作隊　1964「河北定县北庄漢墓発掘報告」『考古学報』1964年第2期　科学出版社：pp. 127－194
中国科学院考古研究所編　1959a『洛陽焼溝漢墓』科学出版社
中国科学院考古研究所編　1959b『洛陽中州路（西工段）』科学出版社
中国社会科学院考古研究所編　1980『満城漢墓発掘報告』文物出版社
中国社会科学院考古研究所編　1989『北京大葆台漢墓』文物出版社
周亜　2005「銅鏡使用方式的考古資料分析」『練形神冶瑩質良工—上海博物館藏銅鏡精品』上海博物館：pp. 54－67

About tombs buried Han mirror in Luoyang

MINAMI Kentaro

370 Han mirrors are reported till now in Luoyang. I examined the burial situation of the Han mirror in this article. As a result of examination, in Luoyang when a many people are buried in one grave, one mirror was buried for one people basically. And when it is buried a corp's belongings one mirror by the grave where many people are buried,mirror buries a corp's belongings to a person except the master of the grave. And the size of the mirror regardless of social position, and when it is buried with a couple, it is buried a corp's belongings the mainly big mirror of the grave. These express the use of a copper mirror during the lifetime and the relations of the maintainer.